

# 女子大学生の自己の顔に対する満足度と衣服選択の関係

西川 愛子

愛知学泉大学 家政学部

## Relation between Degree of Satisfaction for Personal Face and selection in Clothing on Female University Students

Aiko Nishikawa

Aichi Gakusen University

キーワード：顔 Face、衣服 Clothing、衣服選択 Selection in clothing、満足 Satisfaction

### 要約

衣服選択と顔の関係を明らかにすることを目的に、女子大学生を対象とし、自己の顔・体型・髪型に対する満足度および自己の顔の各部位に対する満足度についてアンケート調査を行った。その結果、女子大学生は自己の顔に対して不満足であると感じており、また、いずれの部位に対しても不満足傾向にあることがわかった。因子分析結果から「肌」「口」「瞼」「歯」「眉」の5因子が抽出され、クラスタ分析から6グループで構成されていることが示されたが、衣服選択時に意識する項目については大きな違いは認められなかった。

### 1. はじめに

和辻哲郎は『面とペルソナ』<sup>1)</sup>のなかで顔面を「人格の座」ととらえた。鷺田清一<sup>2)</sup>は現代の都市にあふれる顔を「記号の現象」と表現した。顔は誰にでもあるが、ひとつとして同じものはない。だからこそ、顔はその人物の存在そのものに直結する要素をもつのだろう。鷺田も認める通り、和辻の指摘は正確であったといえる。一方、鷺田の表現も示唆に富んでいる。テレビやインターネットの画面、雑誌の表紙、ポスターなどにあふれる顔は個人としての顔ではなく、商品や企業イメージと結びついた顔であり、記号としての顔といえる。しかも、その顔は、この顔こそが今の顔であり流行の顔であると主張し、その顔に近づけられれば新しいライフスタイルが手に入るような気にさえさせる。若者、特に女子大学生はこうした顔が発信する情報を読み取り、自己の顔をその記号としての顔に近づけようと日々努力しているように見受けられる。なぜなら、多くの女子大学生が磨き、加工するのは人格よりも顔の表面であることが多いと感じられるからである。すなわち、若者にとって顔とは和辻が指摘した「人格の座」ではなく、鷺田が表現した「記号の現象」に追随するためのキャンバスであるといえる。

しかし、顔は生身の身体である。記号としての顔と全く同じものに変えられるわ

けではない。そこに自己の顔に対する満足あるいは不満足が生じる。当然、顔と組み合わせられる衣服に対する満足あるいは不満足も生じることになる。

本研究では衣服と顔の関係を明らかにすることを目的に、前報<sup>3)</sup>では女子大学生の自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係について検討した。本報では前報と同じ女子大学生を対象に、自己の顔に満足しているかどうか、自己の顔の各部位に対する満足度はどのようなものかを検討したうえで、自己の顔に対する満足度と衣服選択の関係について検討した。

## 2. 方法

### (1) アンケート調査

2011年4月～7月に、女子大学生156名を対象に質問紙法による自記式アンケート調査を行った。無効票を除外した人数は143名（平均18.95歳、SD1.01）であった。有効回答率は91.7%だった。

#### 1) 自己の顔・体型・髪型に対する満足度

自己の顔、体型、髪型に対して「非常に不満足(1)」「不満足(2)」「不満足とも満足ともいえない(3)」「満足(4)」「非常に満足(5)」の5段階で評価させ、平均値を算出した。

#### 2) 顔に関する衣服選択時の意識項目

顔に関する衣服選択時の意識項目については、前報と同様のデータを用いた。この調査は「顔を意識して上衣の色を選ぶ」や「顔を意識して下衣の形を選ぶ」などの12項目に、ダミー項目52項目を含む合計64項目に対し、あてはまる項目を全て選択させたもので、選択された項目は1点と換算した。

#### 3) 自己の顔の各部位に対する満足度

自己の顔の各部位に対する満足度について、「目の大きさ」、「鼻の高さ」、「肌のしわ」などの28項目に対し、「非常に不満足(1)」「不満足(2)」「不満足とも満足ともいえない(3)」「満足(4)」「非常に満足(5)」の5段階で評価させ、平均値を算出し、プロフィールを作成した。なお、この項目は先行研究<sup>4)</sup>および予備調査を参考に選出したものである。

### (2) 分析方法

自己の顔の各部位に対する満足度について、SPSS 17.0を使用して主因子法による因子分析（プロマックス回転）を行った。下位尺度の内的整合性の検討にはクロンバックの $\alpha$ 係数を算出し、下位尺度間の相関を求めた。次に、グループ内連結法によるクラスタ分析を行った。なお、各クラスタの人数比率の偏りについては $\chi^2$ 検定を行い、群間差については分散分析を行った。また、TukeyのHSD法による多重比較も行った。そして、自己の顔の各部位に対する満足度と衣服選択時の意識項目の関係について1要因の分散分析を行った。

### 3. 結果と考察

#### (1) 自己の顔・体型・髪型に対する満足度

図1に自己の顔、体型、髪型に対する満足度を示す。全体に「不満足」側に傾く傾向がみられた。顔は体型に次いで不満足度合いが高かった。

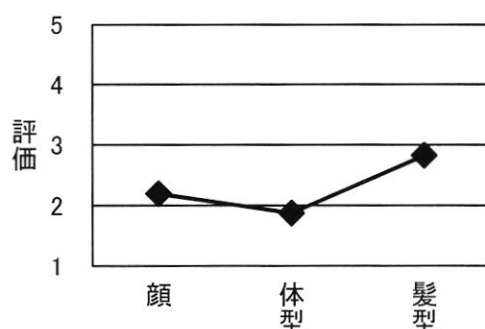


図1 自己の顔・体型・髪型に対する満足度

#### (2) 顔に関する衣服選択時の意識項目

顔に関する衣服選択時の意識項目を図2に示す。なお、このデータには前報<sup>3)</sup>と同じものを用いた。高い得点が得られた項目は「顔を意識して下衣を選ぶ」「顔を意識して上衣の色を選ぶ」「顔を意識して上衣の柄を選ぶ」であった。一方、それほど高い得点が得られなかった項目は「顔から視線をそらすためのアクセサリを用いることが多い」や「顔を意識して上衣の素材を選ぶ」「顔を意識して下衣の形を選ぶ」であった。

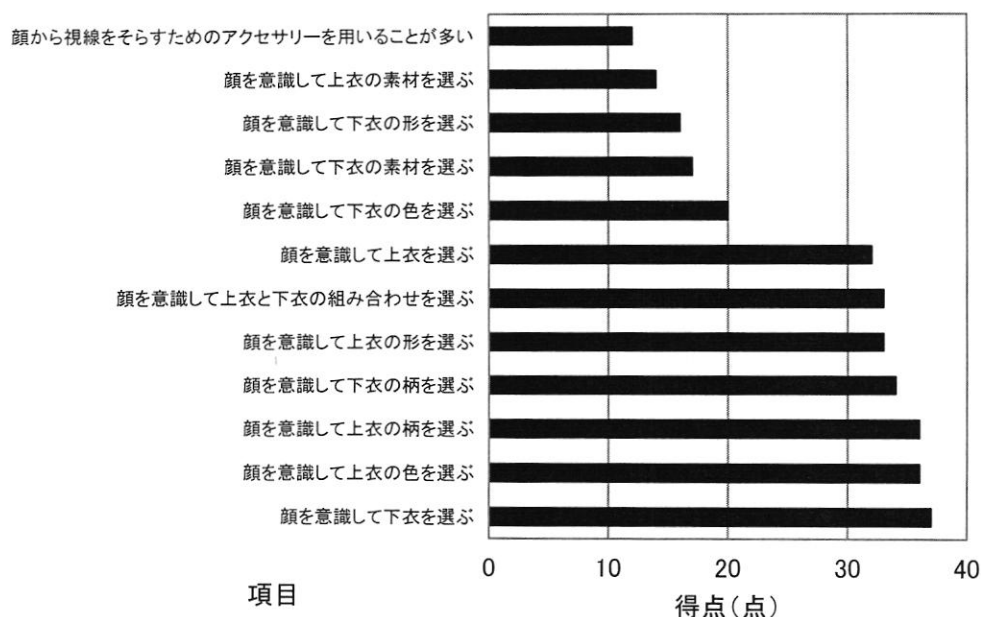


図2 衣服選択時の意識項目

### (3) 自己の顔の各部位に対する満足度

#### 1) 自己の顔の各部位に対する満足度

図3に自己の顔の各部位に対する満足度のプロフィールを示す。この結果、全体に「不満足」側に偏った。特に、「顔の形」「鼻の高さ」「目の大きさ」などは「不満足」度合いが高かった。

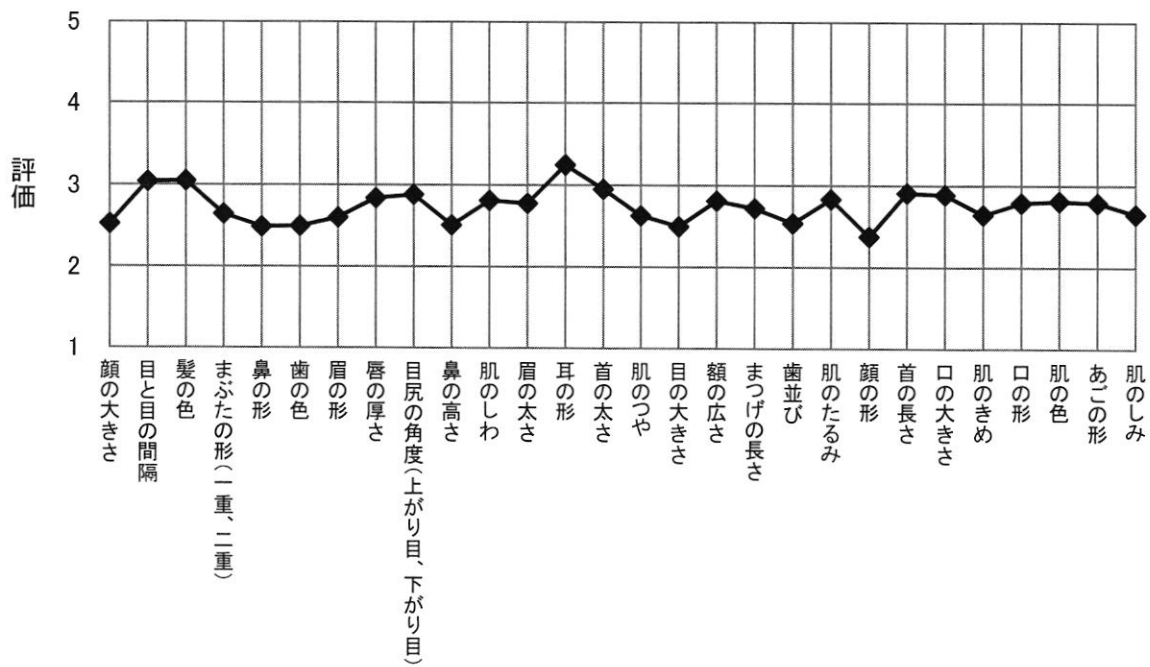


図3 自己の顔の各部位に対する満足度のプロフィール

#### 2) 自己の顔の各部位に対する満足度の因子分析

自己の顔の各部位に対する満足度の評価に使用した28項目から、十分な因子負荷量を示さなかった11項目を除外した17項目について因子分析を行った。その結果、5因子が抽出された。表1に満足度の因子分析の結果を示す。

第1因子は5項目で構成されており、「肌のつや」「肌のきめ」など肌に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「肌」因子と命名した。第2因子は6項目で構成されており、「口の大きさ」「唇の厚さ」「口の形」など口に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「口」因子と命名した。第3因子は2項目で構成されており、「まぶたの形」に高い負荷量を示した。そこで「瞼」因子と命名した。第4因子は2項目で構成されており、「歯の色」「歯並び」といった歯に関する項目が高い負荷量を示した。そこで、「歯」因子と命名した。第5因子は2項目で構成されており、「眉の太さ」「眉の形」といった眉に関する項目が高い負荷量を示した。そこで「眉」因子と命名した。

表 1 満足度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子
肌のつや	<b>0.96</b>	-0.15	0.08	-0.09	0.02
肌のきめ	<b>0.81</b>	0.02	0.04	-0.09	0.04
肌のたるみ	<b>0.78</b>	0.13	-0.01	0.03	-0.10
肌のしみ	<b>0.54</b>	0.07	-0.01	0.20	0.05
肌のしわ	<b>0.43</b>	0.25	-0.18	-0.01	0.15
口の大きさ	0.06	<b>0.90</b>	-0.11	-0.00	-0.09
唇の厚さ	-0.08	<b>0.78</b>	0.05	0.04	0.07
口の形	0.16	<b>0.73</b>	0.01	0.09	-0.08
首の長さ	0.10	<b>0.58</b>	0.01	-0.15	0.15
目と目の間隔	0.01	<b>0.53</b>	0.23	0.05	-0.15
首の太さ	-0.26	<b>0.47</b>	0.05	-0.13	0.39
まぶたの形	0.04	0.04	<b>0.89</b>	-0.07	0.05
目の大きさ	0.00	0.04	<b>0.77</b>	0.10	0.01
歯の色	-0.03	0.03	-0.05	<b>0.82</b>	0.09
歯並び	-0.05	-0.03	-0.08	<b>0.74</b>	-0.02
眉の太さ	0.09	-0.09	0.04	0.00	<b>0.82</b>
眉の形	-0.08	-0.01	-0.00	0.16	<b>0.56</b>
寄与率(%)	33.53	8.62	6.99	5.77	5.02
累積寄与率(%)	33.53	42.15	49.14	54.91	59.93

## 3) 下位尺度間の関連

満足度の下位尺度間相関を表 2 に示す。満足度の 5 つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「肌」下位尺度得点（平均 2.71、SD0.62）、「口」下位尺度得点（平均 2.90、SD0.53）、「眼」下位尺度得点（平均 2.57、SD1.03）、「歯」下位尺度得点（平均 2.52、SD0.80）、「眉」下位尺度得点（平均 2.69、SD0.71）とした。

内的整合性を検討するために、各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、「肌」で  $\alpha = 0.87$ 、「口」で  $\alpha = 0.84$ 、「眼」で  $\alpha = 0.83$ 、「歯」で  $\alpha = 0.75$ 、「眉」で  $\alpha = 0.71$  と十分な値が得られた。

5 つの下位尺度は互いに正の相関を示しており、「眼-歯」間を除き有意な差がみられた。

表 2 満足度の下位尺度間相関と平均、SD、 $\alpha$  係数

	肌	口	脣	歯	眉	平均	SD	$\alpha$
肌	—	0.56**	0.18*	0.29**	0.42**	2.71	0.62	0.87
口		—	0.30**	0.32**	0.38**	2.90	0.53	0.84
脣			—	0.09	0.19*	2.57	1.03	0.83
歯				—	0.27**	2.52	0.80	0.75
眉					—	2.69	0.71	0.71

\*\* $p < 0.01$ , \* $p < 0.05$

#### 4) 満足度による分類

満足度の「肌」得点、「口」得点、「脣」得点、「歯」得点、「眉」得点を用いて、グループ内平均連結法によるクラスタ分析を行い、6つのクラスタを得た。第1クラスタには112名、第2クラスタには5名、第3クラスタには13名、第4クラスタには1名、第5クラスタには8名、第6クラスタには4名の調査対象者が含まれていた。なお、第4クラスタに含まれる調査対象者数は1名と少なく、また、全項目とも非常に高い得点であったため、当初、除外対象と考えた。しかし、「両親にもらった顔であるから満足している」との考えによって評価されたものであることを確認し、こうした考え方も軽視できないと考え、除外しないこととした。

$\chi^2$  検定を行ったところ、有意な人数比率の偏りが認められた ( $\chi^2 = 394.9$ ,  $df = 5$ ,  $p < 0.001$ )。

図4に6群の各得点を示す。第1クラスタは「肌」「口」「脣」「歯」「眉」のいずれの平均値も中程度であったため、「中満足群」とした。第2クラスタは「肌」「口」「脣」「歯」の平均値は低く、「眉」のみ比較的高かったことから「眉満足群」とした。第3クラスタは「脣」が特に高傾向にあると考えられるため、「脣満足群」とした。第4クラスタは「肌」「口」「脣」「歯」「眉」のいずれも高く、満足度も高い傾向にあると考えられるため、「高満足群」とした。第5クラスタは「肌」が比較的高い傾向にあるため、「肌満足群」とした。第6クラスタはいずれの項目も高い傾向にあるため、「やや高満足群」とした。

また、これらの6クラスタはいずれの因子にもほぼ同様の評価をしている「中満足群」「高満足群」「やや高満足群」の3グループと、特定の因子のみに比較的高い評価を示す傾向がみられた「眉満足群」「脣満足群」「肌満足群」の3グループがあるとも解釈できる。

次に得られた6つのクラスタを独立変数、「肌」「口」「脣」「歯」「眉」を従属変数とした分散分析を行った。その結果、「肌」「口」「脣」「歯」「眉」のいずれも有意な群間差がみられた (肌:  $F(5, 137) = 18.04$ 、口:  $F(5, 137) = 11.08$ 、脣:  $F(5, 137) = 18.91$ 、歯:  $F(5, 137) = 12.59$ 、眉:  $F(5, 137) = 22.24$ 、いずれも  $p < 0.001$ )。

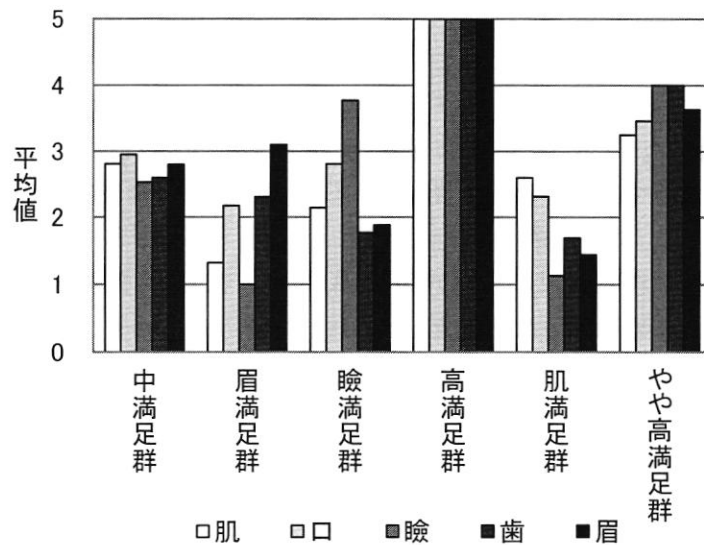


図 4 6 群の満足度得点

#### (4) 自己の顔の各部位に対する満足度と衣服選択時の意識項目の関係

満足度による分類で得られた 6 群の「衣服選択の意識項目」の平均値を図 5 に示す。「眉満足群」の衣服選択時の顔に関する意識項目の平均値が非常に高いことがわかった。一方、「高満足群」、「やや高満足群」、「瞼満足群」は平均値が低く、「中満足群」や「肌満足群」の平均値も高いとはいえない結果となった。これらのことから、特定の部位に不満足と感じている場合ほど、顔と衣服の関係を意識することが多いのではないかと考えられる。

なお、6 つの満足度群によって、「衣服選択の意識項目」の得点が異なるかどうかを検討するために、1 要因の分散分析を行った。その結果、群間の得点に有意な差は認められなかった ( $F(5, 137) = 1.89, p < 0.1$ )。

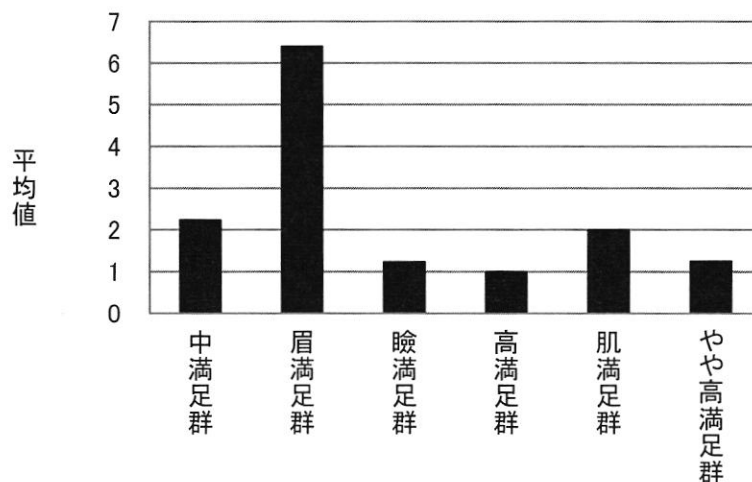


図 5 6 群の衣服選択の意識項目得点

#### 4. おわりに

衣服選択と顔の関係を明らかにすることを目的に、女子大学生を対象とし、自己の顔・体型・髪型に対する満足度および自己の顔の各部位に対する満足度についてアンケート調査を行った。その結果、女子大学生は自己の顔に対して不満足であると感じており、また、いずれの部位に対しても不満足傾向にあることがわかった。因子分析結果から「肌」「口」「頬」「歯」「眉」の5因子が抽出され、クラスタ分析から6グループで構成されていることが示されたが、衣服選択時に意識する項目については大きな違いは認められなかった。しかしながら、女子大学生は自己の顔あるいは顔の特定の部位に対して不満足であると感じており、また、衣服と顔の関係についても全くの無関心ではなかったことから、顔以外の要因が大きく影響しているのではないかと考えられた。

#### 謝辞

アンケート調査にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 三好達治他著「昭和文学全集 第33巻」小学館（平成元年）
- 2) 鷲田清一「ひとはなぜ服を着るのか」日本放送出版協会（1998）
- 3) 西川愛子「女子大学生の自己の顔に対する意識度と衣服選択の関係」愛知学泉大学・短期大学紀要 51 p.15-19(2016)
- 4) 伊地知美知子、小田巻淑子、小林茂雄「女子学生の身体に対する意識と着装の工夫—1992年と2006年の比較—」家政学会誌 vol.61 No.4 pp213-220(2010)